



Title	中世スペイン語の直説法未来と過去未来分析形について
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1999, 23, p. 9-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93835
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世スペイン語の直説法未来と 過去未来分析形について

中 岡 省 治

序

1. 中世スペイン語から17世紀まで、直説法未来と過去未来とに、それぞれ二つの語形式があった。これは、forma sintética「総合形」と forma analítica「分析形」と呼ばれていて、それぞれ、以下の形をとった。

forma sintética: cantaré cantaría ; cantaríe, cantarié

(1) Yo te lo diré. (*Celestina*, I, 58)

「私はおまえにそれをいってやろう」

(2) ¿Podría yo hablar? (*Id.*, *Id.*, 59)

「私は彼女に話しかけてもいいだろうか」

forma analítica: cantar-X-é cantar-X-ía/ie/ié (Xは人称代名詞弱勢形を表わす)

(3) Con todo, (...), traérgela he hasta la cama. (*Celestina* I, 58)

「とはいえ、私は彼の寝床にまで彼女を連れていってやろう」

(4) Pero si la vuestra merçed fuese, paresçerme ía que sería bien ...
(*Estados*, 94)

「しかしもしあなた様のご意志なら、... されてもいいのではないかと私には思えますが」

本稿では、中世スペイン語のテキストに現れた言語事実をもとに、この分析形についていくつかの考察を行なってみようと思う。

なおここでは、主として、Poema de Mio Cid (12世紀) から *Celestina*

(15世紀)までの5点の資料体から、具体的な用例を抽出し、以下の分析の対象とした⁽¹⁾。

2. この二つの語形式については、伝統的におおむね以下のような見方に基づいた説明がなされてきている。それによれば、中世語においては、この動詞の形態には、直説法未来・過去未来としての基本的な動詞語形、つまり、単一形で現れる総合形に加えて、その発生段階の複合形式としての意識が残っていて、これが不定詞と助動詞（ここでは *aver* の直説法現在と不完了過去の活用語尾）に分割されて現れるもう一つの動詞語形を作り出していた、ということになる。この場合、この二つの構成要素を分割する働きをするのは、人称代名詞弱勢形であり、これ以外の形態素がこの役割をすることはなかった。T.A. Lathrop (1984) が、以下にみるように、この分析未来形・過去未来形（以下、分析形とする）を評して、人称代名詞弱勢形の二要素間への挟み込みについては定まった規則がなかったといっているが、この表現の表すところにも、この現象の扱いの難しさがみえるように思われる。

2.1. 諸家の見解

a) R. Menéndez Pidal (1992, p. 324): La lengua no perdió el sentido de la composición de estos tiempos sino muy entrada la Edad Moderna. Hasta el siglo XVII se admitía la interposición de uno o más pronombres entre el infinitivo y el auxiliar: *venir vos edes* por *os vendréis*, *dar le has* por *le darás*, *dezir uos lo he*, *traer nos lo ha*; *holgarnos híades*; en port mod. *dar-lhe-has*, *ver-me-hia*.

「スペイン語は近代も相当遅い時代になるまで、これらの時制の複合性についての意識を失うことがなかった。17世紀まで、不定詞と助動詞の間に、一つあるいはそれ以上の代名詞を挟むことが認められていた。たとえば、*os vendréis* に代えて *venir vos edes*, *le darás* に代えて *dar le has* とし、*dezir uos lo he*, *traer nos lo ha*, *holgarnos híades* としたのである。近代ポルトガル語では、*dar-lhe-has*, *ver-me-hia* という」

b) Thomas A. Lathrop (1984, p. 194): De todas maneras, en los textos medievales la intercalación de un pronombre entre los dos componentes del futuro era una norma flexible. Por ejemplo, en el *Poema del Cid*, aparecen formas de futuro separadas por pronombres y otras que no lo están, como esta: *dexaré vos las posadas*.

「とにかく、中世語のテキストでは未来形の二つの構成要素の間に代名詞を挟み込むことは、柔軟な規則となっていた。たとえば、『エル・シドの歌』では、代名詞によって分割された未来形と、*dexaré vos las posadas* のように分割されていない未来形とが現れている」

c) H. Urrutia C. y M. Alvarez A. (1983, p. 265): La unión de la perífrasis de futuro no se hace de forma definitiva hasta el siglo XVII, es decir, la lengua no perdió el sentido de la composición de este tiempo, admitiéndose hasta entonces la interposición de uno o más pronombres entre el infinitivo y el auxiliar, e incluso otros elementos como la negación <non>: <dar le has>, <traer nos lo ha> ...

「未来の迂言形式の結合は、17世紀までは完全に実現しなかった。すなわち、スペイン語はこの時制の複合性の意識を失わず、その時代まで、不定詞と助動詞との間に、一つあるいはそれ以上の代名詞や、否定辞 *non* のような他の要素までも挟みこみ、*dar le has*, *traer nos lo ha* ... ということが認められていた」

d) Ralph Penny (1985, p. 174): Until the sixteenth century, it was possible for an atonic pronoun to fall between the two components (infinitive and auxiliary) which historically comprise the future forms. Indeed, if the future verb was the first tonic word of its clause, this component order was obligatory (e. g. *Ferlo he amidos*, *Doblarvos he la soldada*, etc., by contrast with *Conseio nos dará*, *amidos lo faré*, etc.). However, this separation of infinitive and auxiliary is already rare in the seventeenth century (when, at the beginning of a clause, *harélo*, *doblaréos*, etc., would exemplify normal practice) and thereafter each future verb-form is viewed as a single unit, with single word-stress.

2.2. しかしながら、中世スペイン語のテキストからも明らかになることだが、直説法未来形と過去未来形（以下、未来・過去未来形とする）とは、一方で、その出発点からすでに単一の時制形式として、他の時制とまったく同じ振る舞いを見せている⁽²⁾。次の文(5)(6)(7)の未来・過去未来形と、(8)の動詞の単純形の機能の間にはなんの違いもない。ここには、未来・過去未来形を不定詞と助動詞とから成る複合形と見なす、といった意識はないのではないか。しかしあえて、分割された未来・過去未来形が、上に指摘されているように、動詞迂言形式から導き出されてしかるべき語形であるとし、かなり自由に分析形の出現をも認め、この二種の異なる語形式の総体を直説法未来形、過去未来形とする、というのであれば、中世スペイン語の動詞活用表には、総合形に加えて、もう一つの動詞変化形をも追加する必要があるのではないかと思われる。

(5) *Dexarévos las posadas, non las quiero contar* (*Cid*, 1310)

「みな様方には宿泊のくだりの語りは控えておきましょう、私はそのことはお話ししたくありません」

(6) si con moros non lidiáremos, no nos *darán* del pan (*Id.*, 673)

「もし我々がモーロ人と戦わなかったとしたら、我々にはパンが与えられないであろう」

(7) *quel' buscarié* mal con todas sus mesnadas (*Id.*, 509)

「その人はその手勢みなを引き連れて彼を討伐に出向いてくるであろうと」

(8) Quando los *falló*, por cuenta *fizolos* nonbrar (*Id.*, 1264)

「彼はその者たちを見たときに、命じてその人数を数えさせた」

3. 分析形と総合形との比較検討

3.1. 形態論の面では、分析形は総合形との間に大きな違いをみせる。まずは、中世スペイン語では、-er, -ir 動詞の場合に、近代語では認められないような、未来語幹をもっていた。avrié (*Cid*, 84), avrá (*Id.*, 642), querria (*Id.*, 104) など近・現代語にみられる不規則形に加えて, creçrá (1905), combré (1021), consintrán (668), verná (532), など, テーマ母音を脱落させてもそこに不自然な子音の連続が生じない限り, 未来・過去未来形特有の語幹が認められていた⁽³⁾。これは, 不定詞の語尾 -er, -ir が, 活用語尾 -é -ía と組んで活用形を作るときに, 強勢音節前の音節の位置を占めることになり, その音節中の母音の e, i を省略したり, そこに修正を加えることができたという事実によっている。したがって, ここにみられる特殊な語幹は, 形態論でいう特定の条件下でのみ現われる拘束形態素であって, 形態的にはもはや不定詞とはいえない。

これに対して, 分析形では, この拘束形態素が現われることがなかった。

(9) *Terné* yo Casteión ... (*Cid*, 450)

「私はカステホンを占領してやろう」

(10) (...), *tener la edes* sin art (*Id.*, 690)

「あなたは遺漏なく私の旗印をもて」

このようにみると, 分析形の構成要素は, それぞれが, 語の水準にある要素に等しいといえるが, 総合形の場合にはこのような定義は当てはまら

ない。ただし、分析形の場合でも、過去未来に現れる活用語尾（助動詞？）の *-ia*, *-ie*, *-ié* には、独立した語としての働きを見いだすことができない、という事実もある。

(11) *que sobre aquellas arcas dar le ien seisçientos marcos (Cid, 161)*

「その長持ちを担保にして彼らはその人に六百マルコを貸し与えるであろうと」

すでに指摘したように、分析形は必ず、「不定詞 -X- *-e/ -ia*」の配列で現れる。この場合は、X は、調査したかぎりでは、すべて人称代名詞弱勢形（以下、弱勢形とする）であり、これは、一要素であっても二要素であっても構わない。また、これら構成要素の相互の位置関係は固定していて、その変更は許されない。

(12) (...), e *ampararte* as de la calentura, e folgaras; (*Alfonso X*, 128)

「おまえは暑気を避けて、休息するがいい」

(13) *enpeñar ge lo he* por lo que fuere guisado. (*Cid*, 92)

「私は適当な額でそれを彼らの担保に入れることにしよう」

3.2. しかしながら、未来・過去未来形が弱勢形をその補語として伴う場合に、すべてが分析形をとるわけではない。近・現代語と同じように、この代名詞は動詞やその他の文の要素に、前接あるいは後接の位置をとって現れてくることも多い。この代名詞と総合形との共立の割合をみると、調査したテキストでは下記のような結果になる⁽⁴⁾。ここからは、分析形とその補語となる弱勢形との存在は、絶対的な関係にはないことが分かる。

総合形と分析形との出現頻度数（総数100例）

	総合形 未来／過去未来	分析形 未来／過去未来	総合形と弱勢形の共立 未来／過去未来
Cid	56/23	16/5	8/3
Alfonso X	38/55	6/1	6/19
Estados	57/34	8/1	19/7

Corbacho	68/29	3/0	17/8
Celestina	68/24	8/0	26/5

ちなみに、上記 Celestina の 31例をみると、すべて弱勢形は動詞綜合形に前置されているが、この動詞はといえば、(絶対)文頭、休止の直後、呼気結集の先頭には立っていない。つまり、動詞人称形に、名詞要素(前置詞句をも含む場合; 7例)、人称代名詞強勢形(10例)、その他の代名詞(2例)、副詞(noを含む; 4例)、疑問詞(3例)、接続詞(4例; como 2, cuando 1, que 1)、al+不定詞(1例)が先行している。ここでは、それぞれ未来・過去未来形を中心としていえば、これらの動詞人称形は、弱勢形を補語として従えても、もしその前に強勢を帯びた語要素があれば、代名詞弱勢形をそれ自身に先行させ、強勢を帯びた語要素に後接させていた、ということになる。この結果は、まさしく次にも示すように、中世スペイン語における弱勢形の文中での配置についての原則に、ほぼ、一致するものである。

3.3. 分析形を成立させる不可欠の要素として、弱勢形があるのは否定しえない事実であるが、この要素の文中での位置、動詞に対する位置は、中世スペイン語に関しては、R. Menéndez Pidal (1956, p. 404) によって、次のように規定されている。“Los pronombres tienden a colocarse, cuanto es posible, al comienzo de la frase; a apoyarse por enclisis en una palabra precedente; y a aproximarse al verbo” 「人称代名詞は、可能なかぎり文の始めに置かれ、前接辞として先行する語に寄りかかり、動詞に近づくという傾向をもっている。」⁽⁵⁾

(14) Dexarévos las posadas. (*Cid*, 1310)

「みな様方には宿泊のくだりの語りは控えておこう」

(15) (...), ternás *me* por capital enemigo. (*Celestina*, I, 151)

「おまえは私を強敵だと思うだろう」

(16) ¿Podría *la* yo hablar? (*Id.*, I, 59)

「私彼女に話しかけていいだろうか」

この三文は、未来・過去未来形が補語としての弱勢形を伴っている場合で、しかも動詞が、文頭あるいは休止の直後に位置している場合であるが、それであっても分析形にはなっていない。この事実は、また、分析形が弱勢形が文頭に立つのを避けるために生じた形式であるとする説⁽⁶⁾への反例にもなると思われる。

この弱勢形の前接辞としての特徴は中世スペイン語だけでなしに、古典期においても持続していた。これは、有名な「ドン・キホーテ」の一文、*Rindióse Camila; Camila se rindió (El Quijote; ed. L. Andrés Murillo, Castalia, 1985, I, p.420)*「カミラが負けた。カミラは負けた」にも、はっきりと現れてきている。しかしその一方で、この弱勢形が後接辞の動きを見せている場合も、早くから記録されてきているといわれる (*Vedada l'an compra dentro en Burgos la casa, Cid, 62*)⁽⁷⁾。しかしながら、この点については研究者の間でも議論があり、一定した見解は得られていないが、少なくとも、15世紀には、明らかに弱勢形を後接辞として扱っている事例が現れてくる。この段階に至れば、代名詞弱勢形は文頭にも立ちうる韻律上の資格を獲得し始めた、ということになる。

あわせてまた、絶対の休止や文中の休止の後に位置して、人称代名詞弱勢形を動詞に後置させる働きをした、*e, mas, que* のような要素との関係でも、これらの小詞に続いて弱勢形が現れ始め－上記の *Celestina* の抽出用例でもこれがみられた－、この分野に生じ始めた内的な変化を知らしめることにもなる。というのは、かつては、これらの接続詞に続いて、その直後に弱勢形が現れることは、非常に少なかったのである。

(17) (...) *e adúzenlas adelant (Cid, 263)*

「彼らは彼女たちをその人の前に連れてくる」

(18) (...), *e se dará al diablo por ver destroyda o destruydo a aquel que la ha ynjurado. (Corbacho, 193)*

「そこで彼女はどんなことをしても、自分に恥をかかせた人が破滅するのを見ようとするだろう」

(19) (...), *o me mataré, o me tornaré mora (Id., 126)*

「私はこの命を絶とうか、それともイスラム教に転んでやろうか」

(20) (...); *que le non despienda en locuras. (Id., 191)*

「彼がそれを狂気の沙汰に費やしてしまわないように」

この代名詞弱勢形が絶対文頭や休止の直後の位置を占める場合も記録され始める。

(21) *Le yo daré a esta villana los tornos e le faré desmemoriar. (Corbacho, 264)*

「私はこの田舎女に訳の分からぬことを吹き込んで、彼女の頭を狂わせてやろう」

(22) *Agora, doña villana, te demostraré yo qué cosa es ygualarse los ribaldos con los buenos. (Id., 264)*

「さて、田舎者のおねえさんよ、よた者風情がまっとうな人と肩をならべようなどとんでもない考えだ、ということを私はおまえに教えてやろう」

このように、弱勢形の前接性は徐々に緩み始める。つまり、*iDame albricias! Decírtelo hé (Celestina, I, 217)* 「私に褒美をよこせよ。おまえにそのことを教えてやるからな」は唯一の構造ではなく、*Te lo diré* の選択肢も可能となり始めたということである。それにもかかわらず、分析形は存在し続けている。したがって、すでにこの段階では、この分析形の現象説明に、上記の人称代名詞の前接性をとり続けることは、妥当とはいえなくなってしまう。

4. 他の側面からの考察

統語論の点からこの分析形をみると、これに平行的な動きをするものとして、もう一つの形式があることに気づく。これは、発生的にも未来・過去未来形と共通性をもち、*haber* を助動詞とし動詞過去分詞を伴う、複合完了形式である。中世語のテキストを観察すると、この動詞複合形式は、「*haber* + 過去分詞」の構造にあわせて、代名詞弱勢形を伴った「過去分詞 + 代名詞弱勢形 + *haber*」の連鎖をもっていることが分かる。これは、「動詞語幹 + *-é / -ía*」に対する異形式「動詞語幹 + 代名詞弱勢形 + *-é / -ía*」

をもつ未来・過去未来形への平行的な現れといえよう。この過去分詞の複合形と未来・過去未来形とは、(a)すでに俗ラテン語にそれぞれの先行形が存在したこと、(b)ともにロマンス語が発達させた時制形式であること、(c)複合形式であり助動詞には *haber* を用いること、(d)そのような異連鎖を発生させるための要素として代名詞弱勢形があること、という点で共通性をもっている。

4.1. これらの形式の出発点となる俗ラテン語の先行形式としては、次のような場合が考えられている。完了形式では以下のような場合がある⁽⁸⁾。

(23) *episcopum invitatum habes*. “has invitado al obispo”.

(24) *metuo enim ne ibi vos habeam fatigatos*. “pues temo haberos cansado.”

このように、*haber* が過去分詞に先行したり後続したりする用例を受けてか、この形式の基底形は《*habeo cantatum*》になっていたり (Lyons 1978 p.226)、あるいは、これとは逆の図式になっていたりする (Bassols 1968, I p.342 では *escriptum habeo*)。

これに対して、未来・過去未来を派生させた俗ラテン語の形式に関しては《*cantare habeo*》が採られている (Lyons 1978, p. 226; Bassols, 1968, p.344 でも *scribere habeo*)。たとえば、次のような場合である⁽⁹⁾。

(25) *aliter praedicantur, quam evenire habent*. “lo que se predice, sucederá (ha de suceder) de otra manera”

(26) *Tempestas illa tollere habet totam paleam*. “esa tempestad se llevará (ha de llevar) toda la cosecha”

(27) *sanare te habebat Deus per indulgentiam, si fatereris*. “Dios, por misericordia, te sanaría (había de sanar), si confesases”

この *habeo* に対する完了分詞あるいは不定詞の二要素の位置のちがいについて、Lyons (1978) は、《The word order given (...) is in each case the one that is significant for future developments, but word order was relatively free at first》(p. 226) と述べて、俗ラテン語での語順の問題をあまり重

要視していないようである⁽¹⁰⁾。

4.2. 以下に、現在完了と称される語形を初めその他の完了形の連鎖で、弱勢形を含み、いま問題としている分析形と平行する構造を、中世語から取り出してみよう。

(28) El rrey lo *ha vedado* (*Cid*, 42)

「王はそれを禁止された」

(29) los seis días de plazo *passados los an* (*Id.*, 306)

「六日の期限、それを彼らは過ごしてしまった」

(30) Tú me la *has aprouado* con toda tu enemistad. (*Celestina*, I, 119)

「おまえはおまえの敵意のすべてを示し彼女のことを私に教えてくれた」

(31) ¡ Fijo mío ! ¡ rey mío ! *turbado me has*. (*Id.*, I., 60)

「わたしの息子よ、私の王様よ、おまえは私をびっくりさせた」

(32) *Cautivádola ha* esta hechizera. (*Id.* II, 57)

「この魔女は彼女を虜にってしまった」

この連鎖のなかの構成要素の位置転換は、上の二つの形式の場合だけでなしに、「ser + 過去分詞」や「estar + ヘルンディオ」にも現れている。

(33) Es día es salido e la noch es entrada. (*Cid*, 1699)

「その日が暮れて、夜が来た」

(34) *Venídom' es* deliçio de tierras d'allent mar (*Id.*, 1639)

「海のかなたの地から喜びの種がやって来た」

(35) Los moros e las moras *bendiziéndol' están* (*Id.*, 540)

「モーロの男も女も彼を祝福している」

(36) y estando lo amatando, salió Cipión de la celada. (*PCG.* 25, a)⁽¹¹⁾

「そして、彼を殺そうとして、スキピオは待ち伏せ場所から外に出た」

4.3. この種の連鎖内の構成要素の配置の違いをみると、未来・過去未来形ほどの厳密さはないが、それぞれの複合動詞形が分析形と同じような内部語順をとる場合には、代名詞弱勢形が大きく関係しているように思わ

れる。この事実をも踏まえて、分析形を「aver + 過去分詞」に重ね合わせてみると、原初のスペイン語では、分析未来形・過去未来形には次のような基底形があったのではないかと推定することができる。

	標準形	異形
(動詞複合形 I)	aver - 過去分詞	過去分詞 - X - aver
(動詞複合形 II)	aver - 不定詞	不定詞 - X - aver

上記の「aver - 過去分詞」と「aver - 不定詞」は、前置詞などの連結要素を介在させない直接的な連鎖で、標準的な *he cantado, cantaré / cantaría* を表すものとする。この二つの形式は、Lyons がいったように、スペイン語でのこれら二形式の出発点となる原初の連鎖と考える。第二列目の「過去分詞 - X - aver」は、上に指摘した *cantado lo he* のような、標準形に対しての異形式で、完了時制にはこのような対立があったことは、すでにみたところである。このような、標準形と異形式との対応の図式を、未来・過去未来形にも適用して、全体の整合性をはかり、未来・過去未来形にも「aver - 不定詞」という基底形を仮定し、ここから「不定詞 - X - aver」が導かれたと考えることも決して不合理ではないと思われる。ここで仮定した連鎖「aver - 不定詞」は、原初スペイン語が俗ラテン語から受け継いで、未来・過去未来形を始め、その他の *aver* と不定詞とが組んで作る迂言形式を生産するのにも関係した、基本的な形式であり、スペイン語文献時代の始めを画する *Glosas Silenses* や *Glosas Emilianenses* に、すでに総合未来形 *tornarat*, 分析未来形 *alongarsan*⁽¹²⁾ を発生させる基底となった形式であると考えてみたい。

このような基底形から実現されて、早い時代に活用形として固定化したといえる未来・過去未来形の連鎖「不定詞 - aver」に、上記のような派生の手順を適用するとすれば、そこからは、「aver - X - 不定詞」つまり **he lo cantar* のような連鎖が導き出されることになる。しかし、この構成の連鎖は、中世語では助動詞 *aver, ser* は、いくつかの制限のために、文頭や休止の直後に立つことができず、また弱勢形を支えることが許されなかったという事実もあって、実現をみるのが困難であった、といわねばならない。それに対して、ここでいう「aver - 不定詞」は、次のような用例が示すよ

うに、中世スペイン語では、決して珍しい形式ではなかったことをも付け加えておきたい⁽¹³⁾。

(37) (...) a los que *han lidiar* tan bien los castigó (*Cid*, 3523)

「彼は戦いをしようとする者達に詳しい指示をした」

(38) Pero devezes saber que para ganar la gloria del Paráyso, que *ha guardarse* omne de malas obras. (*C. Lucanor*, ed. de J.M. Blecua, Castalia, 1971, 285)

「しかしあなた方知るべきは、天国の栄光を手にするためには、人は悪行に手を染めてはならぬということである」

(39) sy algund cuytado o cuytada encuentran con quien *delyvrrar áyan*, so la tierra los cuydan fundir. (*Corbacho*, 107)

「もしいらいらしている男や女が、その怒りをぶちまけられる相手を見つけたら、そんな相手を土の下に埋め込んでやりたいとも思うものだ」

4.4. 上表に挙げた基本的な連鎖は、完了形では「aver + 過去分詞」、未来・過去未来形では「未来語幹（ときには不定詞と同形になる）+ -é / -ía」になるが、これらは、その機能性の面でも無標項であることはいうまでもない。それに対する右の項目は、人称代名詞弱勢形によって特徴付けられた有標項で、X はつねに人称代名詞弱勢形になる。

こうしてみると、この二つの構造の相関は、上記の二者だけでなしに、その他の「助動詞 + 動詞非人称形」の場合にも現れる傾向であるともいえる。たとえば、次のような場合である。

(40) después, qui nos buscare, *fallarnos podrá*. (*Cid*, 424)

「こののち、我々を探し求める者は我々を見いだすことができるだろう」

(41) (...), pues non han número nin cuento, nin *escrevirse podrían*, ... (*Corbacho*, 44)

「というのは、そんなことは数限りなくあるし、書き留めることなどできないであろう」

(42) e en tan conueniente lugar, que mi secreto dolor *manifestarte pudiesse*. (*Celestina* I, 32)

「こんなお誂え向きの場所で、私の秘めたる悩みをおまえに打ち明けられ
そうだなんで」

(43) (...), *darvos quiero vuestra part* (*Cid*, 314)

「私はあなた方にその取り分を与えたい」

(44) (...); *demás, mostrándole por cierta experiencia e razones naturales, conosciendoras a quien leer e entenderlas quisyere*, (*Corbacho*, 44)

「そのうえに、経験や生まれもった理性によって彼にそれを教えるのだが、
それも、ものを読み理解しようとする人には、よく分かっていることだ」

(45) ; *Ha don Malvado ! ¿ Verla quieres ?* (*Celestina* I, 63)

「この極道者め、おまえは彼女に会いたいというのか」

しかし、この「助動詞+動詞非人称形」では、上記の図式が当てはまらない場合も数多くみられる。助動詞あるいは助動詞的な働きの動詞に代名詞弱勢形が後接している場合もみられるのである⁽¹⁴⁾。したがって、助動詞として *aver*, *ser* が用いられる場合と、それ以外の助動詞による複合形の場合とは区別して扱うべきものと思われる。

(46) *tornava la cabeça e estávalos catando*. (*Cid*, 2)

「彼は振り返っては、それらを眺めていた」

(47) (...), *quiero vos lo preguntar agora*. (*Estados*, 85)

「今わたしはあなたにそのことを尋ねたい」

(48) *Et los que son letrados dévenla pedricar* (*Id.*, 99)

「そして学のある人がそれを説き広めるべきである」

(49) ¿ *Hasla visto ?* (*Celestina*, II, 10)

「おまえ彼女に会ったのか」

この部分については、まずは、R. Menéndez Pidal の記述を確認したいと思う。彼によれば、助動詞 *aver* あるいは *ser* と過去分詞とが組む複合形式で過去分詞が文頭に立つ語順は古形式で、すでに Berceo では助動詞が句頭、文頭にくる形式が支配的で、“*siendo raro hallar ejemplos del orden antiguo: oydo lo auedes*, *SDom* 223a.” であり、過去分詞が先行の構造は Berceo でも少数派になっているようである (R. Menéndez Pidal, 1945,

pp.412-13)。しかし、それ以降も、強勢をもつ語要素が先行しない場合の複合形式で、それが補語を弱勢形の形で持つ場合には、過去分詞が先行する構造「過去分詞＋弱勢形＋aver / ser」が現れるのは、まぎれもない事実であって (*Desfechos nos ha el Çid*, ... *Cid*. 1433; *El rey por su merced sueltas me vos ha*, *Id.* 1400; *Prometudo te auien ellos bien andança et por ventura ...*, *PCG*. 74, a), この形式は、少なくとも、18世紀に入っても記録されている。この場合にも弱勢形が過去分詞を、その前接要素としているのである⁽¹⁵⁾。

4.5. このような特殊な構造を保証するといえるような働きの弱勢形は、ダイクシスの場で、照応の働きを与えられた代表的な辞項といえる。とくに、この分析形との関係でいえば、1・2人称についても、また3人称についても使われ、記録されているすべての場合がテキスト内照応、前方指示の場合がほとんどである。ただし、以下のような後方照応の場合もみられる。

(50) d' aquesta quinta que me avedes mand[ad]o
 pagar se ía d'ella Alfonso el castellano. (*Cid*, 494-95)
 「このあなた方が私に送ってきた戦利品を奏上すれば、
 カスティリヤのアルフォンソ王は満足なされることであろう」

しかし、上述したように、総合形の場合にも弱勢形との共立があるのだが、分析形との間ではこの弱勢形との共立のありかたが違っていて、この差がとくに分析形の機能の特徴付けている、とする考え方がある。これは Company (1980, p. 97) によって指摘されたことで、分析形の場合、動詞左辺に直接補語あるいは間接補語が移動した場合に、この要素が必ず動詞句内で弱勢形で繰り返されるが、総合形ではこの反復は任意となるという事実があるといわれる。これはつぎのような場合になる。

(51) a vos e [a] dos fijos d'algo / quitar vos he los cuerpos e dar vos é de [mano] (*Cid*, 1035 - 35b)

「あなたと二人の郷士の身柄を解いて、あなたがたを自由にしよう」

(52) E estas tales fallar las has muy alegres en el tienpo que reyna el vino

(Corbacho, 168)

「そこでおまえは、こうした女達が葡萄酒が効いている間だけは、とても愉快にしているのを見ることだろう」

この総合形との間の振る舞いの違いと、文中における分析形の韻律上の特徴、つまり文頭かあるいは休止の直後の位置を占めるという特徴、とによって、分析形は、それ自体が構成する動詞句あるいはそれと関係する他の文の要素を、話題化して提示するための形式であり、これと連動して現れる休止はこの話題化の対象を指定する働きをしていると、上記の Company (1980, p. 92) は考えている。話題化とは既出の概念を敷衍、展開するための操作であり、それを成立させるためには、そこに関係する二つの項目を、意味的に繋ぎ合わせるための共通の因子が必要とされる。この点で、代名詞弱勢形がとくに前方照応を中心とするその働きから、このための要素として選び出され、これによって特殊な動詞の構造が作り出された、ということは十分に考えられる。このような機能のもとに特徴付けられた構造は、当然のこと有標化された形式で、これが分析形であり、総合形に対立する特殊な形式であった、といえるかもしれない。先にのべたように、未来・過去未来形が弱勢形と共立する場合であっても、必ず分析形になるとは限らないことを、ここで再度確認しておこう。

5. まとめ

スペイン語をはじめ他のロマンス語にも、直説法未来・過去未来形として二種の語形式が存在した（今も存在する言語がある）が、この現象は、従来から、人称代名詞弱勢形の前接辞としての特性に依拠した説明がなされてきた。つまり、弱勢形はその韻律的特性によって文頭や休止の直後には位置しえないので、この弱勢形の位置を確保するために、未来・過去未来形が不定詞と活用語尾の二つの構成要素に分立して、不定詞に弱勢形を前接させた結果、成立した連鎖であるとする考え方である。また、このような分析形が何らかの理由で作り出せない場合には、動詞の前に主語（名詞、人称代名詞など）、副詞（句）などを出して、その直後の位置で弱勢形を受け止め、動詞は総合形をとることができた、ということになる。し

かし、15世紀後半には弱勢形が、文頭や休止の直後の位置をも占めるようになるのに、依然として分析形は存在し続けている。こうなると、分析形存在の理由付けに弱勢形の韻律的特性のみを取り上げ、これだけに依拠して分析形の現象を説明しようとするのは、不都合になってしまう。

『カステイリヤ語文法』のなかでNebrijaは、《El futuro dize por rodeo del infinitivo τ del presente de este verbo, *e, as*, diciendo *io amaré, tú amarás*, que vale tanto como *io e de amar, tú as de amar*. En esta manera dize por rodeo el passado no acabado del subjuntivo, con el infinitivo τ el passado no acabado del indicativo deste verbo *e, as*, diciendo *io amaría, io leería*, que vale tanto como *io avía de amar, io avía de leer*.》「未来形は不定法現在とこの *e, as* の動詞の直説法現在との複合形でいって、*io amaré, tú amarás* とするが、これは *io e de amar, tú as de amar* と同じ意味とみていい。接続法未完結過去（現代語での過去未来のこと）は、不定法現在とこの *e, as* の動詞の直説法未完結過去との複合形でいって、*io amaría, io leería* とするが、これは *io avía de amar, io avía de leer* と同じ意味とみていい。」(Gramática castellana, ed. de A. Quilis, Ramón Areces, Madrid, 1990, p. 200), といって、未来・過去未来形の活用形が二つの語彙要素から成ること、を明らかにしている。

『エル・シドの歌』から初めて中世スペイン語を俯瞰すると、未来・過去未来、総合形と分析形との間にみられる構造上の関連が、「aver+過去分詞」やまた広く「助動詞+動詞非人称形」の組み合わせのなかにもあることに気が付く。ここで、考察の枠を広げて、「aver+過去分詞」の複合形をみると、ここには、総合形に対応するといえる「aver+過去分詞」の構造にあわせて、分析形に対応する「過去分詞+弱勢形+aver」があることが分かる。この要素の連鎖はもうすでに13世紀半ばにおいては古形式であったとする考え方もあるが、これは、本稿のテーマを取り扱う場合には、見逃しえない重要な事実であって、分析形との関連で、この形式が通時的にもつ意味をも検討し直す必要があると思われる。未来・過去未来分析形の出現を可能にする有力な理由の一つとして、この形式には、遅くまで、語源的な複合形の意識が残っていて、分析形は特別な条件下でのこの語源的な形 (E, AS ... + 不定詞 か 不定詞 + E, AS ...) の現れである、と規定されてきている。しかし、(...), *podrán la más aina saber por esta mi obra*

(Nebrija, *op. cit.*, p. 114), (...), *podrían* venir en el conocimiento de ella (Nebrija *Id.*, p. 113), El cuándo lo *dará* no lo sé (*Celestina*, II, p. 36) にあるような *podrán*, *podrían*, *dará* は、すでに中世スペイン語では、その他の単一の動詞定形とまったく同一の活用形でしかなく、その振る舞いもまさしく単一動詞のそれである、としかいいようがない。また、これらの形式の複合性を示す正書法上の特徴もない。

そこで、4.2. にあげたような図式が考えられる。そこにあげた形式「aver + 不定詞」は、スペイン語での未来・過去未来形、それに加えて「aver - ϕ /a/de - 不定詞」すべてを生み出した原初の基底形であり、この未来・過去未来形に遅くまで残ったといわれる複合形としての意識は、cantaré, cantaría; terné, ternía を cantar-é, -ía; tener/tendr-é, -ía に分割するような意識ではなく、「aver - 不定詞」という連鎖への回帰の意識であったと考えたいのである。ここから、活用語尾を語末に置く、スペイン語として無理のない単一の活用形として発展したのが、標準形 (= 総合形) の cantaré, terné; cantaría, ternía であり、あわせてこれは、もう一つの条件付けられた形式の分析形をも作り出す基底になった、といえないだろうか。前述の Lyons (1977, p. 232) も、一部、このような考え方を認めているのではないだろうか。ちなみに、この複合形式は、以下のように、17世紀でも残っている。

(53) testigos son tus palabras, que no *han* ni *deben* ser mentirosas, (*El Quijote*, ed. L. Andrés Murillo, I, 451)

「おまえのことは証人だ、そのことは嘘であるはずもないし嘘であってもならないのだ」

(54) Pues en verdad que no te *he dar* este contento: ... (*Id.*, II, 33)

「さて本当のところは、私はおまえにこうした満足感を与えるつもりはない」

(55) (...), sabiendo que no se *ha añadir* aflicción al afligido, (*Id.*, II, 34)

「苦しんでいる者に苦しみを与えるべきではないということを、よくわきまえているので」

(56) ¡ (...), y mira lo que has de ver y no lo *has creer* ! (*Id.*, II, 143)

「おまえは目に入ってくるものは見よ、しかしそれを信用すべきではない」

もちろんのこと分析形も残っている。

(57) y si fuere tal cual a mi fe se le debe, *acabarse ha* mi sandez y mi penitencia; (*Id.*, I, 306)

「もしそれが私の誠実さへの報いということであれば、私の愚かさもまた私の苦行も終わることになるだろう」

以上、分析未来・過去未来形を中心に簡単な考察を行なったが、このテーマは、スペイン語通時論において、興味ある問題を我々に投げかけている。たとえば、動詞完了形「HABERE + 完了分詞」と直説法未来・過去未来形に対応する俗ラテン語、原初スペイン語での基底形は何か、とくに後者については、「HABERE + 不定詞」かそれとも「不定詞 + HABERE」か、動詞完了形と未来・過去未来形の構成要素間の並行的な統語上の動きとそこにみえる代名詞弱勢形の働き、haber やその他の助動詞が動詞非人称形と組んで作る迂言形式と未来・過去未来分析形との間にみられる構成要素の共通した動き、ここでは言及しなかったが未来・過去未来分析形が否定辞 No と共起しない事実、などである。これら諸点への考察は今後も課題として考えてみたいと思っている。

1999年1月

注記

(1) 中世スペイン語の用例調査のために用いたテキストは次のものである。

Poema de Mio Cid, edición, introducción y notas de Ian Michael, Clásicos Castalia, Madrid, 1984. (略: *Cid*)

Alfonso el Sabio, *Prosa histórica*, edición de Benito Brancaforte, Cátedra, Madrid, 1984. (略: *Alfonso X*)

Don Juan Manuel, *El Libro de los Estados*, edición, introducción y notas de Ian R. Macpherson y Robert Brian Tate, Clásicos Castalia, Madrid, 1991. (略: *Estados*)

Alfonso Martínez de Toledo, *Arcipreste de Talavera o Corbacho*, edición de J. González Muela, Clásicos Castalia, Madrid, 1970. (略: *Corbacho*)

Fernando de Rojas, *La Celestina*, I y II, edición, introducción y notas de Julio Cejador y Frauca, Clásicos Castellanos, Espasa Calpe, Madrid, 1972. (略: *Celestina*)

なお、これ以外にも必要と思われる用例を他の文献から引用している。

(2) たとえば, *Glosas Emilianenses* での, *aluenge seferan* (= *aluenge se ferán*) (*Obras completas de R. Menéndez Pidal*, VIII, *Orígenes del español*, Espasa-Calpe, Madrid, 1980, p. 4), *kaderat* (= *kaderát* = *caerá*) (*Id.*, p. 6) の二つの語形 *feran*, *kaderat* を, 複合形として意識していたであろうか。

(3) R. Menéndez Pidal (1954, II: pp. 285-88) は, 中世スペイン語での縮約未来語幹について, 非常に詳細な記述を行っている。新しい記述では, Paul M. Lloyd (1993, pp. 495-97) がある。

(4) 注記 (1) に挙げたテキスト 5 点を, 冒頭から, 直説法未来・過去未来形とを合わせて, 100例まで用例抽出をした (*Corbacho*では第二部の冒頭部分)。テキストの調査範囲が小さすぎるので, この抽出結果だけでは分析形と総合形との使用頻度の正確な実体はつかめない。なお, この種の調査をもっと詳しく綿密に行い分析したのが, Company (1980, p. 68) で, その調査によれば, 10-15世紀のスペイン語での総合形に対する分析形の出現比率は 12.13%になっている。

(5) 中世スペイン語のみならず, もっと広い展望で通時的に, 文中での人称代名詞弱勢形の位置を論じたのが, 有吉 (1976, 1977) である。

(6) たとえば, Harri Meier (1965, pp. 68-69)。

(7) R. Menéndez Pidal によれば, *Poema de Mio Cid* にみられる, 代名詞弱勢形を後接辞と読めるような表記法, *vedada l'an compra* (62), *venido lês mensaje* (975) は, この叙事詩本来の現象ではなく, 後の写字生の癖がでたものと見なされて, 彼はここに挙げたような形でそれを校訂している (*Clásicos Castellanos* 版)。これに対して, Ivan Michael は, *Vedádal' an compra* (62), *venídol' es mansaie* (975) と読ませている。加えて, F. González Ollé (1983, pp. 3-4) も参照のこと。

(8) V. Väänänen (1967, pp. 209-11). なお, 例文へのスペイン語訳もテキストのもの。

(9) V. Väänänen (1967, pp. 211-13). スペイン語での訳文で, 全訳になっていないものは筆者が付け加えて, 全文訳とした。なお, この点については, Company (1980, p. 73), nota. 43 をも参照のこと。

(10) Harri Meier (1965, pp. 66-67). これ以外に, C. H. Grandgent (1928, pp. 96-130) や Ralph Penny (1985; p. 174) を参照のこと。

(11) PCG. は *Primera Crónica General de España*, publicada por Ramón Menéndez Pidal, Gredos, Madrid, 1995 を指す。

(12) R. Menéndez Pidal, *Orígenes del español* (1980) 中の Glosas Emilianenses の用例で, glosa 番号, 127 と 23 とに当たる。注記(2)も参照のこと。

(13) A. Yllera (1980, pp. 92-95) は数多くの「aver+不定詞」の用例を記録している。この形式は16世紀にも引き継がれ, 17世紀に入ってもいまだ生きていることが確認される。なお, この形式については, C. G. Lyons (1978, pp. 232-33, 237-38) をも参照のこと。

(14) F. González Ollé (1983) によれば, 助動詞と過去分詞が組む形式で, それが代名詞弱勢形を伴い, しかも文頭に立つか休止の直後に位置する場合, 中世スペイン語でまず最初に定式化された語順は, Pagado vos he (Cid. 1075) であった。それについて現れた語順は, y habéis señaládole día (San Juan de Avila; Id., 1983, p. 6) であるとされている。したがって, ここで扱われている助動詞, averとser には何らかの制限が加えられていて, 代名詞弱勢形を後接形として受け止める韻律的な力がなかったとみるべきであろう。こうした, 助動詞, aver, ser に加えられている韻律的な制限も, 未来・過去未来分析形の存在と大きく関係しているのではないだろうか。

ただし, 例文 (49) は, 上記の原則に一致しない新しい傾向を示す場合になる。

(15) F. González Ollé (1983, p. 3)

参考文献

有吉俊二「スペイン語における弱形代名詞の位置 - その史的変遷 -」(その一), (その二) : *Hispanica* (日本イスパニヤ語学会), Vol. 20 (1976), pp. 1-17, Vol. 21 (1977), pp. 1-18.

Bassols de Climent, M. (1963) : *Sintaxis latina*, C.S. I. C., Madrid.

Company C., C. (1988) : “Los futuros en el español medieval, sus orígenes y su evolución”, *NRFH*, XXXIV (1988), pp. 48-107.

Contreras, Heles (1978) : *El orden de palabras en español*, Cátedra, Madrid.

Coseriu, Eugenio (1977) : *Estudios de lingüística románica*, Gredos, Madrid.

González Ollé, F. (1983) : “Enclisis pronominal en el participio de las perífrasis verbales”, *RFE.*, tomo LXIII (1983), pp. 1-31.

Grandgent, C.H. (1928), *Introducción al latín vulgar*, traducción y notas del Francisco de B. Moll, Centro de Estudios Históricos, Madrid.

Lathrop, T.A. (1984) : *Curso de gramática histórica española*, Ariel, Barcelona.

Lloyd, Paul M. (1993) : *Del latín al español*, versión española de A. Alvarez Rodríguez, Gredos, Madrid.

Lyons, C.G. (1978) : “A look into the Spanish future”, *Lingua*, 46 (1978), pp. 225-244.

Meier, Harri (1965) : “Futuro y futuridad”, *RFE*, tomo XLVIII (1965), pp. 61-77.

Menéndez Pidal, R. (1994) : *Manual de gramática histórica española*, Espasa-Calpe, Madrid.

————— (1980) : *Orígenes del español*, Espasa-Calpe, Madrid.

- (1954) : *Cantar de Mio Cid* (texto, gramática y vocabulario), Espasa-Calpe, Madrid.
- Penny, Ralph (1985) : *A history of the Spanish language*, Cambridge University Press, New York.
- Ramsden, H. (1965) : *Weak-pronoun position in the early romance languages*, Manchester Univ. Press, Manchester.
- Real Academia Española, *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid, 1991.
- Urrutia Cárdenas, H. y Alvarez Alvarez, M. (1983) : *Esquema de morfosintaxis histórica del español*, Universidad de Deusto, Bilbao.
- Valesio, P. (1968) : "The romance synthetic future pattern and its first attestations", *Lingua*, 20 (1968), pp. 113-161 y 278-306.
- Väänänen, Veikko (1967): *Introducción al latín vulgar*, Gredos, Madrid.
- Yllera, Alicia (1978), *Sintaxis histórica del verbo español*, Universidad de Zaragoza, Zaragoza.